

とどのつまりどこへ行き着くのか？・・・こうだ。俳優芸術だけが純粹演劇を達成するとしたら、マイム芸術は瓦礫の下で息絶えることになる。劇団で期待されるのはうまい書き手であって、下手な書き手がいれば、失敗につながるとされている。残念なことの一つの言葉がそれを言い表し、定着しているのである。残された上演台本がそのまま<作品>と呼ばれるのである。これを改める方法がある。

1. 30年間、演劇にかかわる他の芸術をすべて廃止する。舞台装置をなくせば、かわりに創造性のある動きを見せる以外にないのだ。
2. 30年のはじめの10年間は、舞台上のすべての高低を廃止する。架台、階段、テラス、バルコニーなど。たとえば同じ高さで向かい合うことになるので、俳優は自分が高く相手が低い所にいることを、何か別のことで伝えようとしなければならない。次に、より困難な創造力を俳優に課する条件でのみ高低を許可する。
3. 30年のはじめの20年間は声を出すことを廃止する。それが終わると、5年間は言葉にならない叫び声なら出してもよい。最後の5年間は、俳優の自発的な言葉のみ許可する。
4. この作戦の時期が終われば、次は定着期である。作品は次のような順序で構成する。
 - A. 基礎的な作業として、演技に最も近いものを書いて用意する。
 - B. 俳優が自分なりの演技をマイムで行い、次にはっきりしない声をつけ、それにそって自分なりのテキストを即興でつくる。
 - C. それに一言もつけ加えることなく、言葉を選び抜いた台本にするために文学関係者を呼ぶ。
 - D. 異なった芸術を再び取り入れるが、あくまでも俳優自身がそれを決める。俳優が家主になればどうしても必要な共同作業としてダンサー、歌手、音楽家などを雇い入れようとするだろう。そうなればポスターには次のように書いてあるかもしれない。
-助太刀による脚本。

はたしてこれが本当の治療法なのか？ 真の演劇がこの課程を経て、芸術の危機を救済してくれるという保証は何もない。素描家が別のものを手本にしたり、画家が照明を手本にしてもそれが役立つかどうか何も保証がないのと同じだ。何かを企てるということに保証はない。それどころか企てることは意思や創造力を必要とするのだ。演劇は一度利き腕を使わないことが大切なのである。

「マイムの言葉-思考する身体」 エティエンヌ・ドゥクルー 1998. ブリュッケ
p.46-47 わたしの考える演劇とは original - 1931.

